

# 訓点資料語彙の文脈つき電子データ提供の一試案

松 本 光 隆

——高山寺蔵不空三蔵表制集院政期点卷第一仮名点箇所訓読文用例集（稿）一——

はじめに

築島裕博士は、『訓点語彙集成』（平成十七年二月～平成二十一年八月、汲古書院）の公開提示によって、古訓点資料を俯瞰した形で語彙分布（訓点資料における語詞の集成）を示され、これによって、平安時代を中心とした訓点資料に現れる語彙の実態を知ることが出来るよう成った。周知の如く、この『訓点語彙集成』の刊行は、従来の古語辞典の全面的改訂を迫るものであることとなった。ただし、『訓点語彙集成』は、出現語詞の存在を、語詞レベルで示されたものであつて、ある語詞の存在は検索によって確認されるものの、飽くまで単語単位の掲出であるという憾みを残すものである。即ち、語彙論レベルでの利用は可能であろうが、意味論の基礎資料として利用しようとした場合、研究者に要求される当然の事柄であるが、原本による文脈の確認が必須となる。

稿者が付度するに、この憾みの一つの解決方向として、『古語大鑑 第一巻』（平成二十三年二月初版、東京大学出版会、以下続刊刊行途中）の出版が開始された。この『古語大鑑』は、所謂、古語辞典の類であるが、これによって、意味論的な補ぎないを『古語大鑑』に求められたものと考えている。

右の二書は、漢文訓読語史研究において画期的な業績であると認めるところであるが、これらに対する批判的な考察に及ぼうとした時、後者の『古

語大鑑』は、項目の執筆者、あるいは、編集者によって『訓点語彙集成』の全ての語詞が用例として掲げられている訳ではないから、『古語大鑑』の意味記述を批判しよう意図した場合、考えられる手立ては、『訓点語彙集成』に掲げられたある語詞の全用例を研究者が閲覧実見して、文・文章単位の調査を行つて、批判を加えるという手順が考えられるところである。

一方、電子データコーパスの構築によって、電子テキストの検索が、多くの資料について可能となつてきている<sup>(1)</sup>。かかる研究状況にあつて、訓点資料言語データの電子化は、中々に進捗を見ないと感じている。国語学の中ににおいては特殊だと言われ続けてきた「漢文訓読語史」研究であるが、例えば、高山寺典籍文書綜合調査団の如く、複数の研究者が参加した研究集団で、継続的に高山寺経蔵の調査を続けている研究者の一つの責務は、引き続き継続的に高山寺経蔵に所蔵される訓点資料の電子データの提供を考えることであろうと考えられるところである。

以下に述べる如く、訓点資料言語の電子データ化を考えようとする時、様々な障害が存していることも事実である。詳細の一部は、次節以降で再び触れるが、電子データとして、如何なる形で提供するのが、コンピュータ上で検索しやすいか否かという問題が大きい。今考えられる訓点資料語彙の公への提示方法でベストなのは、原本影印に、読み下し文を付し、更に、総索引を備える形ならば、必ずしも電子テキストで提供する必要も無いかも知れない。しかし、一資料の全体像を提供するにも膨大な労力と時間が必要となる。また、資料の選別基準の問題が存して、三千点以上に及ぶと

される平安時代訓点資料の加点の粗密によって、優先される資料は、極限られたものとならざるを得ない。実は、三千点以上と言われる平安時代の訓点資料も、儀軌や次第の類は遺存点数が多いものの、その大部分は、言葉量も小さくしかも仮名加点の疎なる資料である。この全文の訓読資料の資料公開提供は、実労の割には実効が少なくと批判されるものとならざるを得ない。信頼性の点で語形や表現の確定が可能な、信をおける豊富な用例を提供する資料として、その利用価値は高くはないと判断されるからである。即ち、公開が優先される資料は、極一部の、所謂良質の加点本であると研究者が判断したものである。かかる状況において、全文の公開という前提からは暫く後退するが、検索の便を考慮しつつ、『訓点語彙集成』の欠を補える次善の訓点資料言語の電子テキスト提供を模索して、一試案を示してみようとするものである。

当然ながら、本稿についての批判を期待しつつ、たたき台として本稿を提示するものである。

#### 一、訓点資料言語データの検索上の困難

訓点資料の電子データの公開提供自体は、さほどの困難を伴うものではないであろう。例えば、本稿の場合も、刊行後に広島大学学術情報リポジトリに掲載されるであろうが、このリポジトリ入稿を、今使用しているソフトである Adobe の InDesign から PDF ファイルに出力して、これをサーバで公開して戴ければ、PDF ファイルでの文字列検索が出来る訳であるから、機械的な検索は簡単に行うことが出来る。

しかし、問題の所在は、どのような形に整形した電子データを提供するかと言う問題であろう。即ち、PDF ファイルの読み下し文に基づき簡単に機械的には検索できるが、検索者側が検索のキーワードを如何に設定するかと言った問題が存する。つまり、訓読文の生データの提供だけでは、如

何にも検索が不便で、しかも、常に検索漏れの不安を抱えねばならないことになるからである。

例えば、平仮名漢字交り文資料の場合、生翻字データであっても表記は、大きくは、平仮名か漢字か、あるいは、語によつては漢字＋平仮名で表記されるのが基本であろうから、活用語の場合は活用語尾の変化を想定して、考え得るバリエーションの全てを尽くして検索を掛けることが、労を厭わねば必ずしも不可能ではないし、データを整形されて、検索プログラムが組まれて提供されている場合も少なしとしないから、そうした利用の便に恵まれた環境で検索が可能となりつつある。

稿者は以下ようには捉えてはいないが、「漢文訓読語史の学が特殊である」との不当なる評価の一因には、訓読文の複雑さがあるものであると考えられる。即ち、片仮名加点は片仮名を用いて訓読文を作成し、ヲコト点の表示には平仮名を用い、また、研究者の恣意の補読には（ ）を付して、片仮名または平仮名が用いられるのが基本となっている。

しかし一方、諸符号の表記は学界的にスタンダードは存しないと思われるし、複数の研究者によつて同一資料の訓読文の公表が成されている場合には、その訓読文間の校異も夥しいものが有る場合があつて、これに対する批判―利用資料としての潜在的不安―も存する。また、複数の訓読が施された箇所には異読を立てるから、用例の文脈が折れ曲がる。研究上の諸種のレベルでの訓点資料言語に対する不確実性や困難が実際に存在して、研究者の慣れないと言う主観的・感覚的疎外感が存する点を認めるのに稿者も吝かではない。

こと、生の訓読文電子データの提供に対する検索の問題に限れば、想定されうる検索上のキーワードの設定の問題が大きい。

まず、ある語詞の検索には、キーワードの想定が尽くされたものか否かの判断に不安が付きまとう。即ち、ある語形の表示に、一資料中に様々なバリエーションが想定されて、片仮名表示・ヲコト点表示（検索ワード入

力の平仮名片仮名の別)の問題、完全付訓・部分付訓(片仮名・ヲコト点交りの表示は元より、一語のどの音節の加点があるかも状況によって様々である)の問題が大きいであろう。極端な話、煩を厭うなどの精神論に立てば、機械には頼らず訓読文の端から端まで自分の目で検索せよと言うことになるう。

以上のようなことを想定した場合、電子データとしての検索の便を考えれば、データそのものの整形の方針を立てて、データを蓄積する必要が生じる。稿者は、検索プログラムが書けるような力を持ち合わせないが、現存の遺存訓点資料の絶対量を視野に入れれば、一個人、あるいは、少数数の研究者集団だけでは、訓点資料の大半をカバーできる言語データ蓄積が可能であると思われる。多数の研究者個々人が個々人の資格において、しかも数世代を重ねて入力した電子データが集積されれば、将来的に全体像が見通せる、そんな遠大な道筋を考えても許されるのではなからうか。即ち、研究者個々人に個性があらうから、データ形式が異なつたものとして提供されるかも知れないが、研究者個々人、あるいは、研究者の集団の複数が公開して蓄積したものが公に提供されることが重要であらう。

そう考えれば、コンピュータの初心者から上級者までが気軽に入力・蓄積できる方式を採るべきで、殊更に入り組んだ様式を一般化すべきではないし、入門段階の学部生でも用例の理解、入力の出来る様式が望ましい。

## 二、過去の訓点資料訓読文の電子データ化の例

稿者の関係する限りにおいての過去の訓点資料訓読文の電子データ化の例を掲げてみる。久遠寺本本朝文粹は、昭和五十五年九月に汲古書院からモノクロの写真複製が出版され、この複製本を依拠資料として学生達と訓読文の作成を行ったことがある。その実例を以下に示してみるが、テキストデータベースで訓読文の電子データ化を行って、数年間の成果を蓄積し

ようと試みたことがある。データ自体は公開したものではないが、そのテキストデータ作成の際の凡例と実際の訓読文一部を以下に掲げてみることにする。この電子データの蓄積の最大の目的は、久遠寺本本朝文粹の訓読文を継続的に作成する際、既に蓄積した電子テキストデータを検索して、後の訓読文作成進行上に実証的根拠を求めるために検索の便を考慮したものである。想定した検索は、久遠寺本本朝文粹に存する漢字の単字を検索できれば良いものであった。訓読文作成の凡例は以下のものである。

### 本朝文粹訓読文「ㄨ」入力 凡例

一、久遠寺本本朝文粹に加点された訓点に従って、訓読文を作成する。加点の片仮名は片仮名で、ヲコト点は平仮名で表示する。私に補読したものは、( ) に包んで平仮名で表示する。

一、訓読文の入力にあたって、本文の漢字は、「ㄨ」第二水準までに含まれる漢字の内、旧活字体にあたるもので翻字する事を原則とするが、「ㄨ」第二水準までに該当の字体が存在しない場合、すなわち、外字に相当する場合は以下のように処理・入力しておくものとする。

◎「ㄨ」(口+縛)      「ㄨ」(水+齋)      など

また、踊り字で訓読に際して元の字が分かりにくいものは、踊り字の後に元の字を( ) に包んで表示する。

一、原本の行数は、各行頭字に▲を付した上に、『身延山久遠寺藏重要文化財本朝文粹』(昭和五十五年九月、汲古書院)の頁数・行数を算用数字で表示する。

一、訓読文作成時において、不読を表示する場合は、

◎「於」「也」      など

また、再読の二度目の読みについても、以下のように表示する。

◎「當」(再讀)

一、本文のルビは、以下のように表示する。活用語は、語幹を「ㄨ」に括り、活用語尾を本行に送る。副詞・接続詞は、最終音節を本行に送ることを原則とする。

◎來「キタ」ル      來「(き)タル      迎「ム(か)ヘテ      など

また、左傍訓の表示は、以下による。

◎呼「左、ヨハ」ヒ      稱「左、(と)ナ」ヘテ      など



また、熟字訓の表示は、以下による。

◎以「コノカタ」来 然「(しか)レト」而モ など  
一、本文に付された符号は、それぞれ以下のように示す。

声点◎東(平) 業(入濁) など

返点◎山(返)に登(る)。山(一)に登(二)る。 など

\*返点は、雁点・返点を兼ねた「て」のヲコト点ともに(返)で表示する。

句切点◎(漢字中央の「・」)↓・ (漢字右下の「・」)↓。

音読符・訓読符◎天(音) 土(訓) など

人名符◎教隆(人名) など

また、一漢字に複数の符号が重なる場合は、

「音読符・訓読符」「声点」「二点」「返点」「片仮名点」「ヲコト点」

の順に表示する。

一、異読のある箇所は、「イ、」と注記した括弧に包んで表示する。

一、割注は、へに包んで表示する。割注内の改行は「」で表示する。

一、久遠寺本の闕損部を他本によって補填した場合、《》に包んで表示する。

一、文の切れ目と思われる箇所で句読点のない箇所には、適宜スペースを入れる。

一、訓読注は訓読文末尾に一括し、本文中の被注字句にはその直前に「\*」を付す。

一、以上の訓読文は、「X」ファイルの形で、集積するものとする。

検索機種の汎用性を考えたもので、テキストデータベースの訓読文を作成した。実際のデータの第一部は、左に掲げた如きものである。所在のページ数、行数以外は、全画の第二水準までの文字を使ったもので、片仮名の振り仮名訓点や、返点、声点の表示、再読などの注も総て全角文字を使って、本行に組み込んだものである。

003.05 ▲改元(の)詔 慶保一\*胤

003.06 ▲詔「セウ」ス唐堯「之」民(返)を馭(去濁)「キヨ」スル「也」・敬「ツ、シ」ンて時(返)を授(く)(返)と雖(も)而モ未(た)號(返)「カウ」アラ「未」(再讀)。漢「武」之「俗」(返)を撫「ナ」ツル

003.07 ▲「也」・初て建「元を以而」て「名(返)と爲「す」。爾「シカシ」自(り)以來(た)・或は休「キウ」一様に遇「ア」フ以「て」元(返)(音)を開キ 或は災「サ

イ」一變に

003.08 ▲依(り)以「て」曆(返)を革「アラタ」ム。朕(去)「チン」庸(平)「ヨウ」一虚(返)ナルを以て猥「ミタリカハ」シク神「器」を守ル。日(返)を慎(む)ことは(れ)幾

003.09 ▲多「イクハ」クの日ソ・年(返)を計「カソ」フレは只(た)十五年。\*天「之」

未「イ」(また)忘(返)レ「未」(再讀)「サ」ル屢「シハ」妖(平)「ヨウ」一恠(去)

「クワイ」を呈「アラハ」シ\*而「て」相(ひ)一

003.10 ▲誠「イマシ」ム。徳「之」是(れ)\*薄キ・競(平)「キヨウ」一(入)「テキ」

を致(す)と雖(も)而モ消(返)「え」不。去「イン」シ「年」\*黍(上)「シヨ」稷(入)

「シヨク」之「炎」一

003.11 ▲早に遇「ア」ヘル「矣」民「戸」殆「ホトヲ」ト天(返)無(し)。宮「室」之

灰(平)一燼(去)「シン」と爲「ナ」ル「焉」・阜「居」唯(た)地(返)「チ」ノミ有

(り)。修(返)「ツク」ランと

003.12 ▲欲「ヲモ」へは又(た)百一姓(の)「之」費(一)「ツキエ」を作(二)「ナ」ス。

將「マ(さ)」に廢(返)「ス」テンと「將」(再讀)「ス」レハ素「モトヨ」リ「人(の)

「之」居(一)「音」に非(二)「らす」。「于」

003.13 ▲懷(返)「フトコロ」に側(入)「ツク」左、ソク一隱(上)「イン」左

イン「すれは」寤(去濁)「コ」一寐(去濁)「ヒ」に忍(返)ヒ難シ。方に「今」上(去)一

玄(平)(の)「之」謹「セメ」便「スナハ」チ是(返)の如シ・中「丹(の)「之」謝(去)・

奈「何」イカンカ」セント

003.14 ▲欲「ス」ル。宜(く)正(去)一朔(平)を改メ以「て」率「シュツ」一土(の)

「之」聽(一)「キ」を易(二)「カ」へ・徳一政(返)を施(し)て以て圓(平)一

004.01 ▲扉(平)「ヒ」(の)「之」冤(上)「タシナミ」を解(中)「ト」ク「宜」(下)「再讀

(し)。其(れ)天元六年(返)を改メて永觀元年と爲「セ」ヨ天「左」テム一ト「左

ケ」(返)に大「左、ノタイ」一赦「左、シヤ」一シテ

004.02 ▲今日「ケフ」(訓)「左、コンニチ」の味(去)「マイ」一爽(上)「左、ノサウ

已「前」左、ノセン」に・大(平濁)「タイ」辟(入濁)「ヒヤク」已「下」ケ」\*罪・

輕「重と無ク。已「イ」發「ホツ」覺(入)・未「ミ」一

004.03 ▲發「覺」已「結」正・未「結」正・咸「コト」ク皆(な)赦「除セヨ」之。

又(た)一\*度竊「セツ」盗「タフ」の

04.04 ▲「貝十蔵」(平濁)「返」「サウ」ヲ計「ハカ」ルに・三一端(平)已「下ナラハ・

同ク以て赦「免セヨ」但(し)八「左、ハツ」虐(入濁)「キヤク」左、一キヤク」・

故「殺（入）・謀（ム）」「殺（入）・私（上）」鑄（平濁）「シユ」――

004.05 ▲「錢（上）・強（竊）」「盜（上）（返）（を）」「\*犯（ヲカ）シテ常（赦）所（不）免（者）（モノ）」は赦（限）（二）リに在（二）（返）（ら）不（又）（た）老（人）及（ひ）

004.06 ▲「僧（尼）の年百（歳已）」「上ナランには穀（ヨネ）四（\*斛）九（十以上には三斛）八十已

004.07 ▲上には二斛。七十已上には一斛（二）「□ク」給（二）「タマ」へ。庶（コ）ヒ  
「幾（ネカハク）」は餘（殃）を「於（\*未）〔ヒ〕」「\*萌（返）〔左、マウ〕」に攘（二）「ハ  
ラ」ッ

004.08 ▲「幣（俗）を〔於（有）截（入）（二）「セツ」に期（二）「コ）セン。遐（平）――邇（上  
濁）（返）に布（シ）告（ツ）ケテ朕（か意）を知ら令（メヨ。主（者）施（シ）――行（す

004.09 ▲ 永觀元年四月十五日  
【本朝文粹 訓讀注】

003.05 「嵐」――下欄外「嵐」トアリ

003.09 「天」――左上点アリ不審

003.09 「而」――左下点不審、「て」トス

003.10 「薄」――擦消アリ

003.10 「泰」――擦消アリ

004.02 「罪」――「羅」ヲ訂シ右傍ニ「罪」ヲ書ク

004.03 「度」――右上墨書アリ不審

004.05 「犯」――左傍ニ「ホム」ハツキヤク」トアリ

004.06 「斛」――左傍ニ「一」ヲ擦消ス

004.07 「未」――右傍「メイ」見消

004.07 「萌」――右傍ニ墨書アリ不審

右のテキストデータは、最終的には、

003.05 ▲改元（の）詔 慶保嵐\*

003.06 ▲詔ス・唐（堯）「之」民（返）を馭（去濁）スル「也」・敬（フ）ンテ時（返）を授（く）（返）と

003.07 雖（も）而（モ）未（た）（號）アラ「未」（再讀。漢武「之」俗（返）を撫（ナ）ツル▲「也」・  
初て建（元）を以（て）而（名）（返）と爲（す）（以下略）

とした組み上がりを想定したもので、この組み上がりの表示を総てベタに  
全角文字でテキストデータ化したものであった。先のテキストデータの形  
と、右の組み上がりのデータを比較した場合、後者の方が明らかに文脈を  
楽に追えることは明白である。即ち、先のテキストデータの形はあくまで

も便宜的なものとしての位置づけであった。検索の用も、当初は、漢字の  
単字検索ができれば良いとの判断で行ったものであるが、訓読語の語彙検  
索には極めて不便なもので、先のテキストデータの形から訓読語彙が検索  
できるように整形するには、一語一語のタグを付ける必要がある。例えば、  
テキストデータの形のままで加工するとすると、

003.06 ▲詔「セウ」【セウ】ス【す】・唐（堯）【たうげう】「之」民【たみ】（返）を【を】  
馭（去濁）【キヨ】【ぎよ】スル【す】「也」・敬（フ）ン【つしむ】テ【て】時（返）  
【とき】を授（く）（返）【さづく】と【と】雖（も）【いへども】而（モ）【しかも】未（た）  
【まだ】號（返）【カウ】【かう】アラ【あり】「未」（再讀）【ず】。漢（武）【かんぶ】「之」  
俗（返）【ぞく】を【を】撫（ナ）ツル【なづ】（以下略）

平仮名の総タグを付したが、こうしたテキストデータの形のままでは、即  
座には殆ど文脈を捉えることができない。これに、語性の情報を付加した  
りすれば、さらに複雑なテキストデータとなって、即座の実用性の放棄に  
等しいこととなる。

文脈を簡単に把握できて、しかも稿者のような、普及して標準化してい  
るとも言えそうな Word や Excel などのソフトが使えず、電子データの扱  
いに未熟なものが、上級者と肩を並べて等し並みに入力でき、しかも、複  
数の人間が関与して電子データの扱いに能力差ができない形を選択しよう  
とした場合に、より簡便な組み上がりのデータを用意しようとすれば、各  
人の能力差があつて、可能な限りでの入力は、如何にすれば良いのであろ  
うか。各自の利用するワープロ等で表現できて、しかも、ワープロの種類  
を選ばず、漢字の単字検索と訓読語彙が文脈付でかつ、読みやすいデータ  
として検索できる様式。その形を求めようとした場合の改善の方法は、次  
節のような形が一案として考えられても良からう。

### 三、平成二十五年一月現在における電子データ提供の一試案

高山寺には、重要文化財第一部第239号として、不空三藏表制集六帖を蔵する。この資料は、過年論考をものした資料であるが、まず以下には、巻第一を取り上げて、検索の便を考えつつ、訓読文の用例集を掲げて批判を仰ぐこととする。以下、凡例を参照戴きたいが、訓読文の一文単位の掲出と、所在情報に続いて、検索の便を考えて検索用の見出し語にあたるものを付して提示したのが、本資料集の骨子である。

仮名点の総加點箇所の一文字単位での用例掲出と、検索用語の用意は、意味論などの研究を想定して、ある程度の文脈を備えた形で用例提示を意図したものである。しかし、ヲコト点での語形表示を、今、無視した形を採ることとなる。全文ではないので、元より文章・文体研究のための資料提示を殆ど放棄したことになるが、現時点で、仮名点箇所を特定して取り上げる根拠は、以下に基づく。

訓点資料の訓読において、語形の特定のための手懸かりとして確度が高いのは、仮名点の加點箇所である。片仮名の場合、基本的には一字が一音節に対応したものとして帰納推読される。ヲコト点の表示に比べれば、語形認定の確度は格段に高い。訓点資料から帰納される片仮名の字体表は、経験上、ヲコト点の帰納結果に比較して揺れが少ない。片仮名に準ずる漢字「令」「給」「事」や「べ（V・シテ）」が訓点に現れる場合があつて、仮名（相当）一字対一音節の対応が完全には実現されていないが、合拗音表示の「火」なども語形特定には大きな支障はなく、むしろ合拗音表示の確度の高い例であろう。訓点資料における語形の確度の問題からすれば、仮名および仮名に準ずる文字は、確度高く音節の復元が出来ると認めて良からう。

これに比べて、ヲコト点は、一符号に対する対応音節の推定確度が低い場合が存する。平安時代も多く、後半期になつて点図集に現れるヲコト点種が使用される訓点資料は、論理的にヲコト点図を根拠にした各々の資料のヲコト点の帰納がある程度保証されようが、特殊点とされるヲコト点加

点資料群や、ヲコト点図集に未掲載のヲコト点種、特に、平安初期の訓点資料群については、現代の研究者の帰納した推読が実証的根拠が薄いまゝ混入する。即ち、過去の資料に基づく実証的論拠を欠いたヲコト点とヲコト点の担う音節価値に基づく訓読文が作成されているのが現実である。過去の研究に遡れば、例えば、山田本法華経方便品平安初期点の複数の訓読文、知恩院蔵大唐三藏玄奘法師表啓平安初期点の複数の訓読文の校異の存在は、全ての異同についてではないが、ヲコト点の帰納結果の差に基づくものも少なしとしない。仮名点の対応音節の帰納よりも、ヲコト点による帰納結果の方が確度が低いとの評価は当然であろうと思われる。

よつて、より確度の高い仮名点の加點箇所の全例を対象とし、しかも、電子テキストとしての検索の便を考えた用例集を試みに提示してみたい。かかる形式の電子テキスト提示は、全文訓読文公開には当然劣るものではないが、仮名点加點箇所の少ない、片々たる資料も対象に含み込めるし、何よりも、プログラミング技術を持ち得ない稿者のようなものでも、訓点資料の電子テキストを文脈付きで提示して電子データの蓄積に貢献できる長所を持ち合わせているものと信じるものである。例えば、様式案としては後に用例集として掲げる如く、

35、輕シク宸ケム嚴ゲカを黷シ「イ、黷す」「伏（し）」「テ」深「ク」戰越ス「イ、戰（ぎ）越」クに深シ」沙門智藏、誠フシ惶フシ誠恐謹言（一…三ウ3、・かろがろし・シンゲム・けがす・て・ふかし・す・をのく・ふかし・をのく・）

の様な形、あるいは、これに準ずる方式でのPDFファイルでの蓄積を想定している。

かつて、テキスト形式のデータを対象に、UNIXベースのAWKやperlなどが使われて、日本語資料のテキスト形式の電子データから簡便な索引や用例集の作成が試みられたことがあつたと、稿者は記憶している。残念ながら、稿者は現状での日本語資料の機械処理の水準を全く承知していないが、右の例35の様な場合、PDFファイルに対するソフトでプログラムが



組めるのなら、行末括弧内の索引ならば見出し語、あるいは、タグに相当する「・% % %」と用例集一行の行頭にある用例番号「35」とを抜き出して、五十音順配列をすれば、簡単に簡易索引が作成できる理屈である。語性の情報を付加するにしても、

35、輕シク宸<sup>ケン</sup>嚴<sup>ゲン</sup>を黷<sup>ダク</sup>「シ」「イ、黷す」「伏（し）」「テ」深「ク」戰越「ス」「イ、戰（き）越<sup>ヲス</sup>クに深シ」沙門智藏、誠<sup>マコト</sup>惶<sup>ヒヤウ</sup> 誠恐謹言（一・二三ウ3、・かろがろし）【形】・シンゲーム<sup>ヲス</sup>けがす【四動】・て【助】・ふかし【形】・す【サ変動】・をのく【四動】・ふかし【形】・をのく【四動】・）

などの品詞情報なりを付け加えるのは行末の（ ）内で済ませられるので、この情報が如何に複雑になろうが、文脈を保証する訓読文自体の読み解き易さ、受け入れ易さを壊すことがない。

以下に高山寺本不空三藏表制集院政期点の用例集として実際に掲げた様式は語性の情報を割愛したが、先述の如く、訓読文の文脈を付して、実際に入力公開の方法を採りうるものである。しかも、PDFファイル形式でのネット上への公開なら、断続的に連載で掲載しても、利用者側において、Adobe Acrobatを使用して切り貼りが出来るので、一資料体の分割連載用例の、分割掲載した複数の原稿PDFファイルを統合して、一資料体の検索が、一ファイルで簡便に行えることとなる。繰り返すが、稿者は具体的な手順や、可能性を判断できないが、PDFファイル形式に対して、簡易索引作成のためのプログラムが作成可能で運用できるものなら、ある一資料体の仮名点加箇所総索引が簡単に作成できることとなる。複数の個人、複数の集団が、時間的な幅を持つて作成・公開した用例集の断片をかき集めて、同様の処理が行えるなら、例えば、平安時代三千余点の訓点資料の全ての仮名点加例を、研究者個人の手元に置いて閲覧の検索、あるいは、簡易索引作成が可能となることとなる。

即ち、稿者は、誰でも用例蓄積のための用例集作成に参加できて、しかも、コンピュータの熟達度には無関係に老弱男女が関われる様式で標準を定め、

しかも文脈が読みやすく簡便に利用できる方式を模索すべきであることを主張したい。

ただし、稿者には、井の中の蛙的な近視眼的思考で、長期の将来的展望に欠けるのではないかと不安が強く、大方の率直な批判を戴きたいと心底念じている。

#### 注

- 1、電子化された日本語資料は多数に登るが、近時、「日本語歴史コーパス（先行公開版）[http://www.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/chi/apply/](http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/chi/apply/)」（国立国語研究所「日本語歴史コーパス」公開担当）が公開されている。  
また、国立国語研究所において萌芽発掘型「訓点資料の構造化記述」（実施期間・平成二十一年十月～平成二十四年九月、プロジェクトリーダー・高田智和）<http://www.ninjal.ac.jp/research/project/c/kunten/>・試験公開 <http://www2.ninjal.ac.jp/kongochokyo/>の研究期間が終了している。

- 2、拙稿「高山寺蔵不空三藏表制集院政期点について―上表と勅答の訓読語における待遇表現法を中心に―」（『高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集平成二十三年度』平成二十四年三月）参照。なお、用例集に掲げた一文の前後の漢文脈の検討には、「SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース」（<http://21dzk1.u-tokyo.ac.jp/SAT/>）に公開されている本文を利用できる。

#### 【付記】

本稿は、未完を承知で、本報告論集に掲げて、公の批判を仰ぐと決断した背景には、Facebook 上を通じて、種々に教示載っている大阪大学・岡島昭浩氏の投じられたポストに触発されたところが大きい。このポスト（岡島昭浩・二〇一三年一月二日 17:48 <http://www.facebook.com/okjma/posts/578085792217624>）は、「共有範囲：昭浩さんの友達」で投じられたポストで、公開をされたものではないが、○春日政治先生の著作権が切れたから、金光明最勝王經の訓読文などを電子化できるのではないかと思つたが、なかなか難しい。（以下略）

にはじまるもので、春日政治『金光明最勝王經古点の国語学的研究』に掲げられた読み下し文の電子データ化を試みられたものである。切っ掛けを作つて戴いたことに深謝申し上げる。





す・)

17、收復西京を賀(する)、表一首(一・二ウ5、・をさむ・)

18、大興善寺三藏沙門智藏言ク。(一・二ウ6、・いはく・)

19、竊に聞(く) 惟「レ」天大、非「ナリト」爲(す)。(一・二ウ6、・これ・なり・と・)

20、元聖に非(す)は、以(て)天(返)に順(ひ)誅上「イ、誅」を行中(ふ)コト無下シ。(一・二ウ6、・チウ・つみ・こと・なし・)

21、惟「レ」王、天に法「ル」「イ、法ル」(一・二ウ7、・これ・かたどる・の・とる・)

22、興王に非(す)は、以て天(返)に代(り)物を育「フ」コト無(し)。(一・二ウ7、・キヨウワウ・やしなふ・こと・)

23、伏(して) 惟(みれば) 陛下、功、立極に超エ、道混元(たら)「シメタリ」。(一・二ウ7、・こゆ・しむ・たり・)

24、堯の寶圖を續「イテ」禹の丕績に復ス。(一・三ウ1、・つぐて・ヒセキ・フク・す・)

25、自頃元兇已に殄「ヒテ」殘孽「イ、殘孽」猶迷シ、陛下、義倒戈(返)を待(ち)恩、善(去)貨先シ。(一・三ウ2、・このころ・グエンクキヨウ・ほろぶ・て・ザンゲツ・のこり・の・くあせ・なり・やひ・す・タクワ・ゼンタイ・さきんず・)

26、暫ク獵武(返)勞(し)永ク材狼を滅ス「イ、滅セリ」。(一・三ウ3、・しばらく・ヒブラウ・ながし・す・す・り・)

27、京輩自樓臺に肅清して望シ奉セシめ、陛下從人欲(返)に俯(ひ)て克ク天心に叶「フ」。(一・三ウ3、・より・す・す・しむ・よし・かなふ・)

28、山川移(ら)不、園苑舊キカ如(く)今變興既に降(り)て聖政惟レ新ナリ。(一・三ウ4、・ふるし・が・これ・あらたなり・)

29、方に昭カニ昊穹(返)に報シ斯の仁壽上を濟中「ハムトス」將下。(一・三ウ5、・あきらかなり・カウキウ・す・すくふ・む・と・す・)

30、上皇、汾陽(の)「之」賀導キ、上(上帝天也祭於此)帝、圓丘(の)「之」壇に類セリ。(一・三ウ6、・みちびく・エンキウ・す・り・)

31、沙劫に(し)而轉法輪を演「ヘテ」千界(返)に朗(にし)而佛日懸(け)タリ。(一・三ウ7、・のぶ・て・たり・)

32、智藏(入名)久(しく)王化(返)に霑(し)重(ね)て漢儀を覩ル。(一・三ウ1、・みる・) 33、生成已に多シ、報効何「ヲカ」冀ハム。(一・三ウ1、・おほし・なに・を・か・ねがふ・む・)

34、鳧藻(の)「之」至(返)に勝(待)「エ」不謹(み)「テ」銀臺門(返)に詣リ「イ、詣」「テ、」奉表陳賀以聞ス(一・三ウ2、・フセウ・たふ・て・いたる・まうづ・て・す・)

35、輕シク宸嚴を黷「シ」「イ、黷す」、伏(し)「テ」深「ク」戰越「ス」「イ、戰(き)越、」クに深シ「沙門智藏、誠惶誠恐謹言(一・三ウ3、・かろろし・シンゲム・けがす・て・ふかし・す・をのく・ふかし・をのく・)

36、乾「元(平瀧) 光天、大聖文武、孝感皇帝ノ批(左傍墨訓「ヲクカム」アリ、「オクカキ」歟未詳(一・三ウ6、・ケングエン・の・おくがき・)

37、諡は文明武徳、大聖、大宣孝皇帝「イ、大宣孝皇帝を諡「シヌ」(一・三ウ7、・ブンバイ・す・ぬ・)

38、狡(上)猾(入)の「之」流、久ク殘「イ、殘」暴を爲「ス」。(一・四ウ1、・カウクワツ・たぐひ・ひさし・センボウ・そこなふ・なす・)

39、天、其の禍を厭(ひ)卒に敗亡を以て「す」。(一・四ウ1、・つひに・ハイバウ・もてす・) 40、城闕(返)を顧(み)而依然、士庶(返)に臨(み)而威「クニ」若(し)。(一・四ウ1、・セイクエツ・ことごとくに)

41、感慰(の)「之」「イ、感慰「ママ」「之」至「レル」、深「ク」朕「カ」懷「ニ」在「リ」。(一・四ウ2、・やむ・む・いたる・り・ふかし・が・おもひ・に・あり・)

42、賀「ユル」所知ヌ。(一・四ウ2、・す・ぬ)

43、伏(し)て承「レハ」「イ、承「レハ」官軍、捷「イ捷」を獻(し)東京を收復す。

(一…四オ5、うけたばる・うけたまはる・ば・かちもの・シウフク・す・)

44、逆黨水ノコトクに銷(え)て王の師獨剋「テリ」「イ、剋チヌ」。(一…四オ6、ひ・の・ごとし・いくさ・かつ・り・かつ・ぬ・)

45、生靈慶快シテ失ノ圖「ヲ」扑躍(す)。(一…四オ6、す・て・の・ト・を・ベンヤク・)

46、智藏、聞(く)、徳に逆「フ」者は亡「ヒ」已「カ」孽「入瀾」「イ、孽」は追「レ」難(し)「トイフコト」「於」竹葉(返)を垂「レテ」允「ニ」是(れ)格言「平瀾」「ナリ」「イ、是(の)格」「シキ」言允チ(たり)。(一…四オ7、さかふ・ほろぶ・が・ゲツ・わざわひ・の・がる・と・いふ・こと・たる・て・まことなり・カクゲン・なり・ただし・みつ・)

47、狂胡の華を「イ、華「ヲ」」亂(待)「シ」自三歳を経(待)「む」「ト」向「イ、ト向キ」。(一…四ウ1、みやこ・クワ・を・き・より・と・す・と・す・き・)

48、神人(の)憤(返)「ヲ」怨「ミ」惡一念「上」貫「チ」盈「チテ」「イ、貫盈(て)は」陛下、肝ケテ食「シ」宵ニ衣「て」筆醪(平)膳を等(しく)「ス」。(一…四ウ1、いきどほり・を・うらむ・アクシム・みつ・みつ・て・ひたく・て・す・よは・に・タシラウ・ひとしくす・)

49、遂に「使「メツ」股肱(をし)て力(返)を畢「シ」熊武先(にする)コト「イ、先「タムコト」を争「フ」」。(一…四ウ3、つひに・す・しむ・つ・つくす・イウブ・こと・さきだつ・む・こと・あらそふ・)

50、廟略遺(る)「コト」无ク「イ、无「ナリ」」、神功再(せ)不(一…四ウ3、こと・なし・なり・ふたたびす・ず・)

51、期の破竹(返)に乗「テ」彼の倒「戈(平)に會「ヘリ」」。(一…四ウ4、のる・て・タウクワ・あふ・り・)

52、一戎ヲモテ「イ、一戎して」「而」三ヒ捷ツ「イ、三「捷(する)」「こと累に臻「リ」、旬「日」に「シテ」而て兩都咸(く)「ニ」復「ス」」。(一…四ウ4、つはもの・を・もて・イチジウ・みたび・かつ・サムセウ・しきりに・いたる・す・して・ことごとくに・す・)

53、斯(れ)實に睿「謀廣「ク」運(ひ)て」「イ、運「ナリ」」英略(せ)不(待)「る」

こと莫シ(一…四ウ5、エイボウ・ひろし・なり・なし・)

54、常(返)に殊(待)「ナリ」聖力匡「持」シテ「イ、匡持モテ」「イ、匡持」特に列「辟」「ヨリ」高「シ」」。(一…四ウ5、ことなり・キヤウヂ・す・て・もて・ただす・ことなり・レッツヘキ・より・たかし・)

55、方將に(し)て「イ、方「ニ」」「將」勒「シテ」東岱(返)「ヲ」崇「メテ」「イ、東岱を勒崇して」報を上玄に「昭」「カニス」「イ、上玄(に)「昭報「ス」」」。(一…四ウ6、まさに・す・て・トウタイ・を・あがむ・て・あきらかにす・す・)

56、智藏幸(ひ)に昌明(返)を保(ち)「佇」「ヒ」、盛禮を觀むを「イ、觀「ル」」」。(一…四ウ7、たもつ・こひねがふ・セイレイ・みる・)

57、扑躍(の)「之」至に任(せ)不(一…四ウ7、ベンヤク・)

58、宸嚴(返)を輕黷(し)深(く)戰越「ニ」伏(す)、沙門智藏誠歡喜謹言(一…五オ1、に・)

59、皇帝「ノ」批「イ、批」所賀(する)所、知「ヌ」」(一…五オ4、の・おくがき・セイ・ぬ・)

60、沙門不空言「ヌ」」。(一…五オ6、まうす・)

61、不空聞「ク」」。(一…五オ6、きく・)

62、道「ハ」惟れ帝の先(平)「イ、先」「ナリ」、帝道治ギときには「則」神功不「宰」「ナリ」「イ、宰「□ハ」不」」。(一…五オ6、みち・は・さき・なり・あまねし・なり・さいはふ・)

63、孝は徳の本「爲「リ」」」。(一…五オ7、もと・たり・)

64、至「德茂「クシテ」」「而」克く元符を受「ク」」」。(一…五オ7、もし・して・うく・)

65、伏(して)惟(れ)は陛下、天(返)に膺(き)堯ヲ「イ、堯に」續「ギ」人(返)「ニ」從(ひ)禹に復「ス」」」。(一…五オ7、を・つぐ・に・す・)

66、物(返)を易「ヘ」不(し)而二儀貞觀「ナリ」」」。(一…五ウ1、かふ・なり・)

【以下続】